

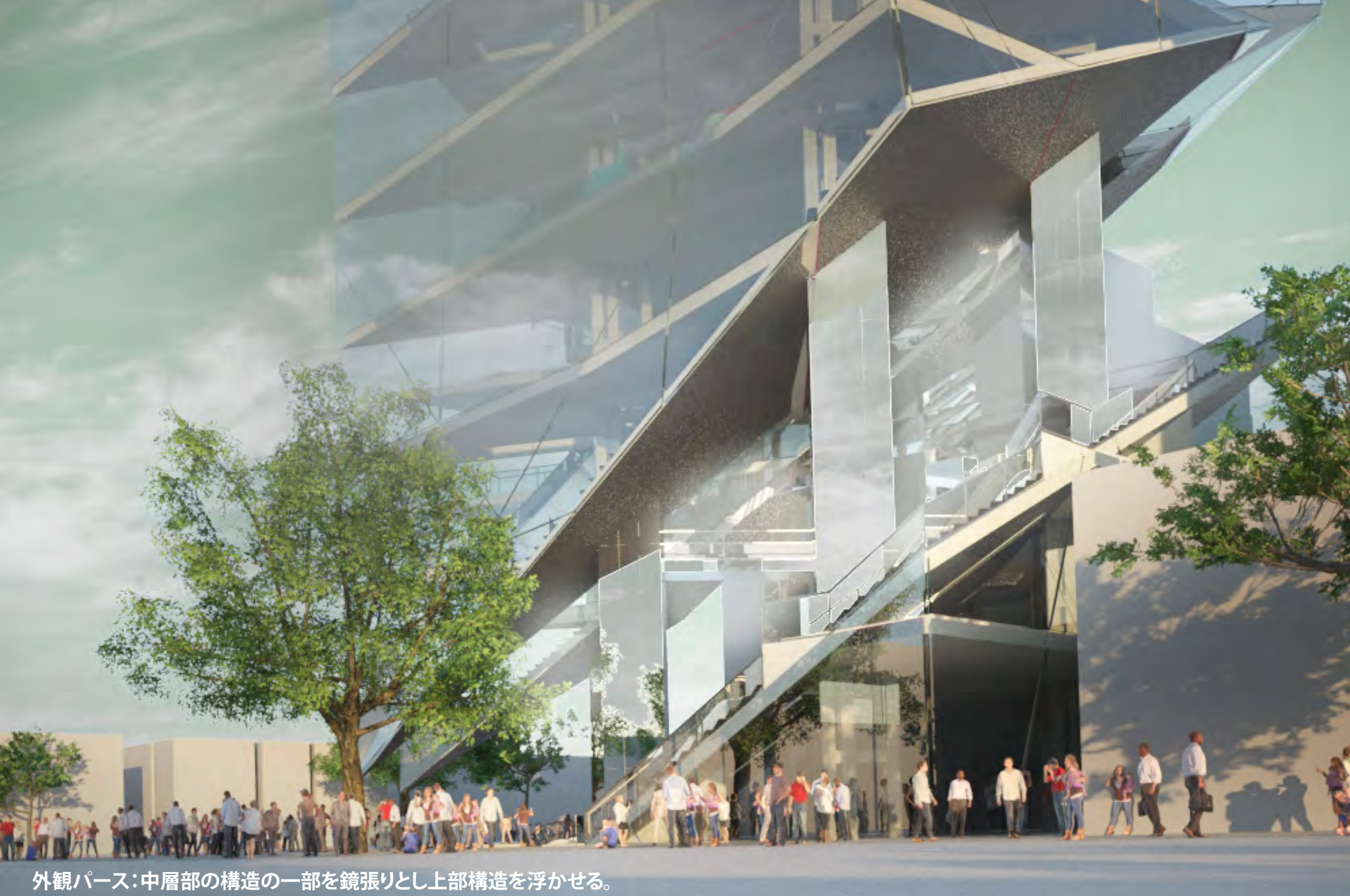
LEVITATED MASS

Program Statement

地域としての表参道はブランド旗艦店の集積としてだけでなく、明治神宮への参詣路や閑静な住宅街、B to B など様々なプログラムがケヤキ並木や広い道路形状に仲介され独特の雰囲気を形成してきました。

ハイカルチャーの中心として、表参道という名前自体が、ある種のブランド、地域の持つリソースとなっている一方で、顕著なジェントリフィケーション、家族向けアクティビティの不足などの問題も指摘されてきました。

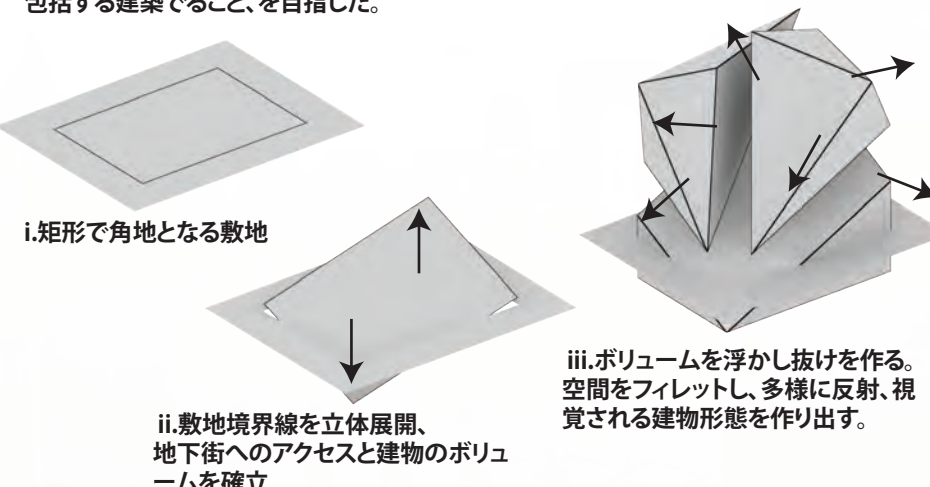
こうした分析を踏まえて、プログラムに依存せず、より包括的かつ建築的にオープンネス、公共空間としての質を高める建物の提案を行いたいと考えます。



外観パース：中層部の構造の一部を鏡張りとし上部構造を浮かせる。

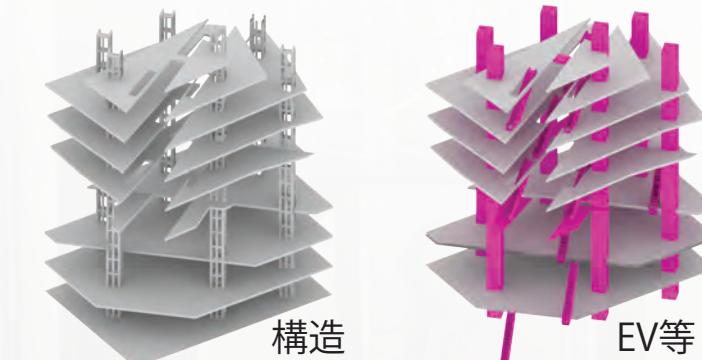
1.設計プロセス

建物のデザインはランドスケープ的に立体的な回遊性を高めること、ii. ストリートに対して開かれた建物にすること、iii. 2つの通りに面する両義性を包括する建築であることを目指した。



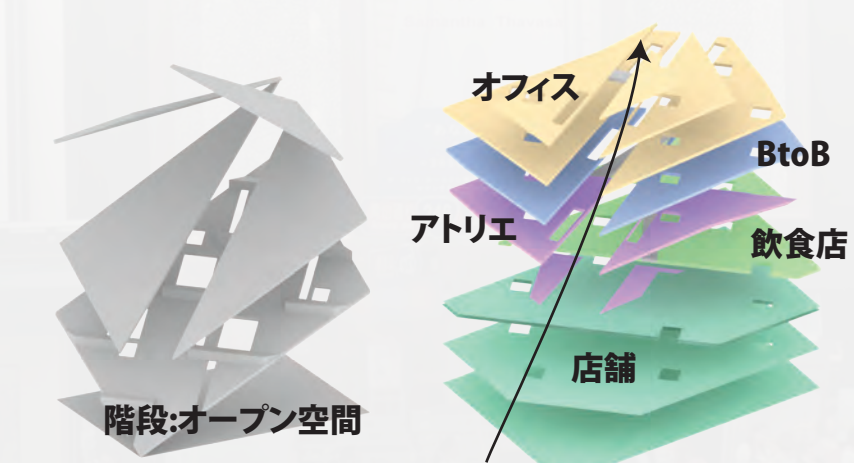
2.構造

建物は基本的にRC造、軽量化のため上部構造体のみ鉄骨造とする。エレベーターシャフトを取り囲む鉄骨フレームは建物を貫き、2つのボリュームを持ち上げている。各階高は開放的な空間とするため、原則6mとする。



3.垂直性

外階段、EV、エスカレーターは建物に立面的連続性をもたらし、ストリートの賑わいを建物に取り込む。建物に張り付く大階段は立体的な公園（緑や遊具にかぎらず）として建物に立面的ダイナミクスを与える。

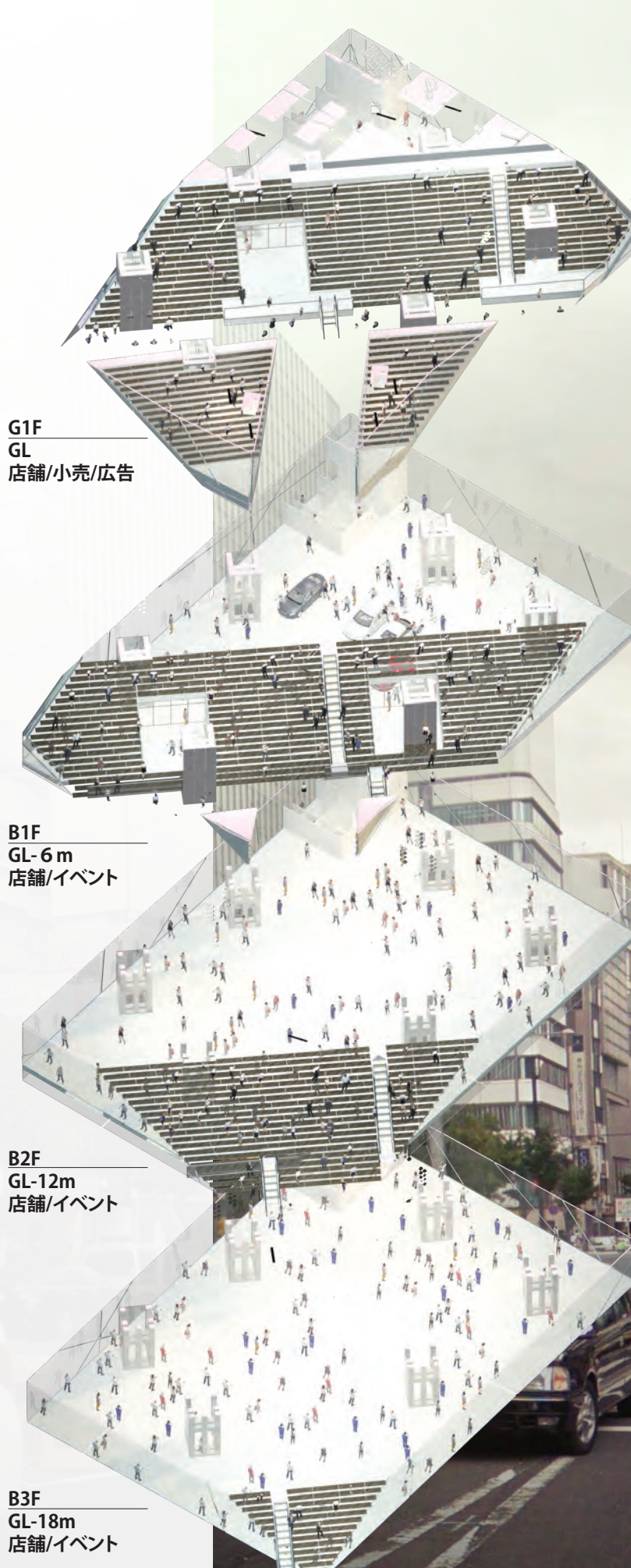
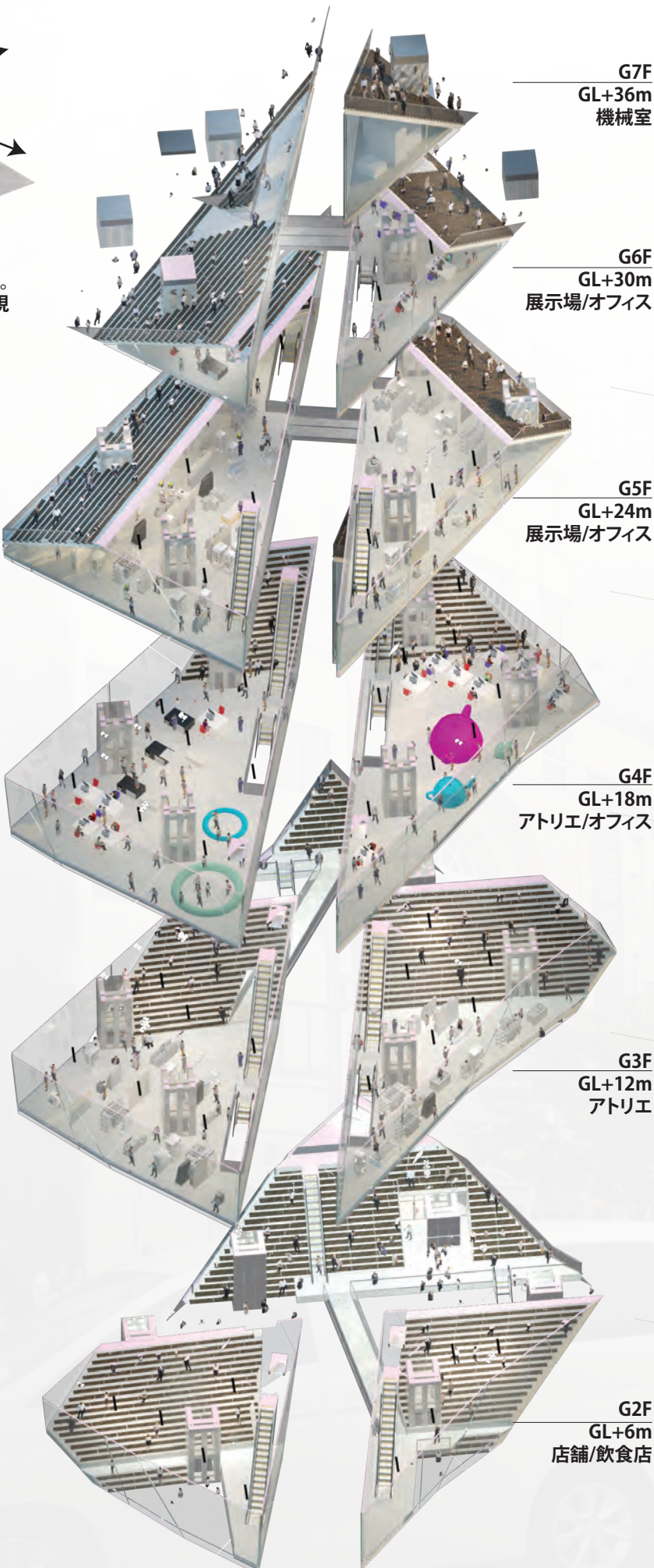


4.プログラム

矩形的敷地は商業ビルとしても広く、一方でその広さ故に内部に行くほど通りから隔離される。またこうしたストリートの浸透性のグラデーションは立体的にも起こるため、プログラムもそれに対応する。建物は廊下や階段などの空間を多く持ち、これらは動線用途にかぎらず各プログラムのバッファーとなる機能を持つ。

5.ゾーニング

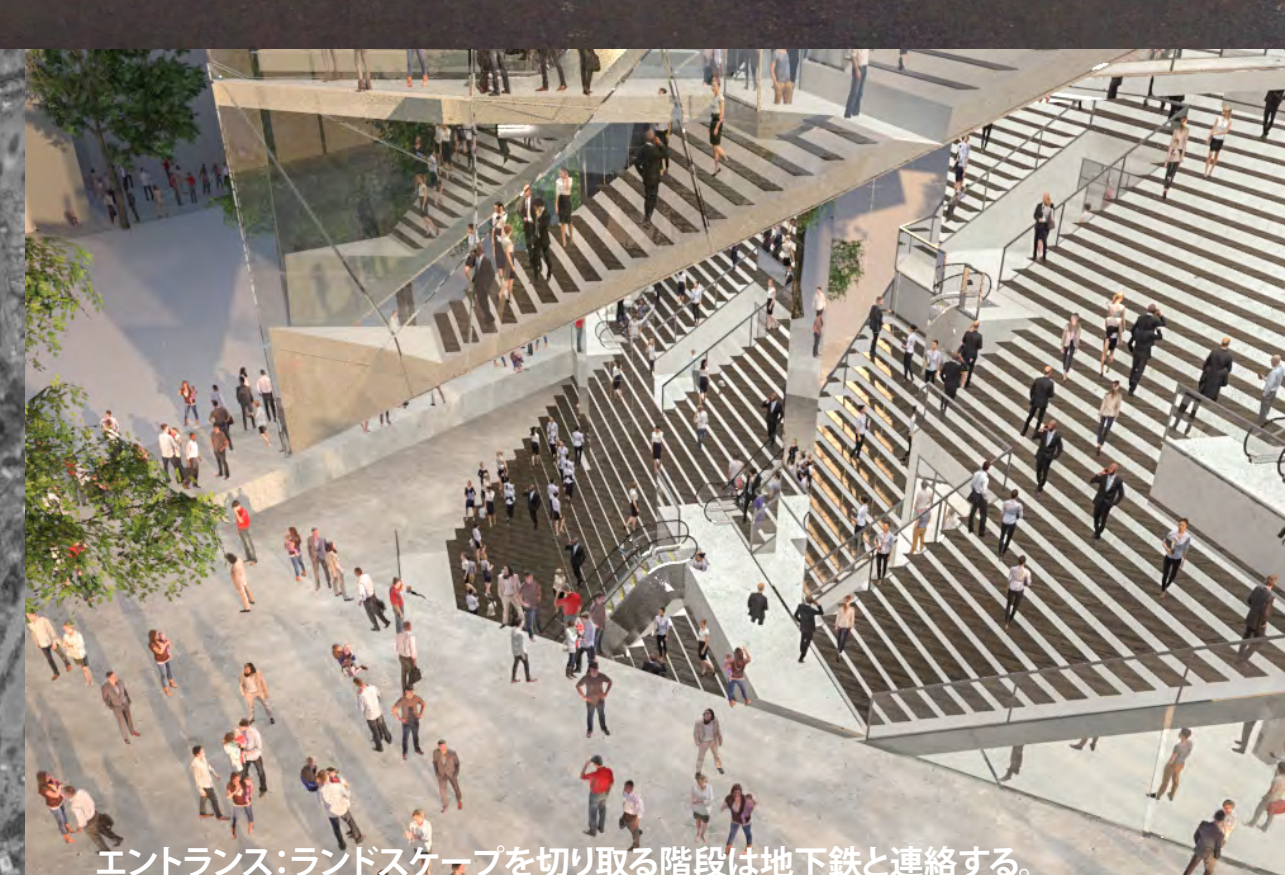
アイソメ図は6m間隔の建物の水平断面を表す。3つのボリュームは水平・垂直に接続されプログラムをつなぐ。



ボリューム間のギャップは動線を妨げるものではなく、むしろ空間どうしに視線の抜けを作る。



敷地は表参道と青山通りという微妙に性質が異なる2つの通りの交差点に位置する。フティックなどの高級ブランドの旗艦店が並ぶ表参道に対して、青山通りはオフィスやB to Bを中心とした軸線を持っている。



エントランス：ランドスケープを切り取る階段は地下鉄と連絡する。



内観：建物内部は折衷的なプログラムが階段で立体的になる。



建物を覆う階段